

園藝文化



No.131

ご挨拶

公益社団法人 園芸文化協会 会長 三好 世紀

会員の皆様、賛助会員の皆様には、当協会の活動に対し、物心両面のお心遣いを賜り心より厚く御礼申し上げます。

さて、ここ数年はコロナに明け暮れ、ロシアのウクライナ侵攻による資源エネルギーや諸物価の高騰が、日本の国力低下に影響を及ぼしています。そんななか、花卉の消費動向に目を転じると、家庭での需要が伸びており、花に興味がなかった人たちにも少しは癒しを与えているものと確信しております。都市環境や都市生活のもたらすストレスの解消を、花に求める傾向にあるのが、現代の特長と思います。

住宅も、耐震や耐火といった機能面が優先され、日本の木造家屋が激減しています。それに伴い、当り前のように見られた桜や梅、椿、紅葉、菖蒲など江戸時代から日本人がこよなく愛してきた植物が、日常的に見られなくなりました。街路樹の下を花壇にする、建物の一角に花や花木がある憩いの場所を作る、など自治体にも積極的に関わっていただけることを願ってやみません。また教育の場においても、日本独特の春夏秋冬の自然の美しさに触れ、心を育み、心豊かになることを願っております。

花は心のビタミン剤、心の安定剤だと思います。園芸文化は、人が生きていく上での癒しの文化だと思います。

令和5年 吉日

CONTENTS

園芸文化 January 2023 No.131

寸暇録 (すんかろく) 連載第六回

牧野富太郎著作本とその出会い

小笠原 左衛門尉亮軒

そして、牧野先生が巻き起こした植物図鑑競合を辿る

(おがさわら・さえものじょうりょうけん)

1

牧野富太郎博士の文献に見るエピソード

小松 みち (こまつ・みち)

6

牧野記念庭園を訪ねて

『園芸文化』編集室

南場 浩一 (なんば・こういち)

奥 峰子 (おく・みねこ)

8

フラワーデザインに託して

川崎 景介 (かわさき・けいすけ)

10

牧野富太郎博士の植物愛を存分に体感できる 高知県立牧野植物園

公益財団法人 高知県立牧野記念財団 広報課

12

アーカイブ

「花咲翁の知恵袋」より がらくた農園始末記

柳 宗民 (やなぎ・むねたみ)

13

事務局より (協会案内)

13

牧野富太郎博士 ゆかりの聖地 西 東

『園芸文化』編集室

[裏表紙]

表紙写真【練馬区】

姫紫陽花 ヒメアジサイ

Hydrangea serrata (Thunb.) Ser. var. *yesoensis* (Koidz.) H. Ohba
f. *cuspidata* (Thunb.) Nakai

Synonym: *Hydrangea macrophylla* (Thunb.) DC. subsp. *serrata* (Thunb.)
Makino var. *amoena* Makino

牧野富太郎博士が発見し、花が優美であることから命名 (P. 9参照)。生前の博士は庭で愛でていましたが、その後、自宅跡の牧野記念庭園では消えていました。一方、高知県立牧野植物園では、博士の次女・鶴代氏が贈った一枝が半世紀以上大切に系統保存されてきました。2022年、博士の生誕160周年を記念して、高知の植物園が「里帰り」を提案。5月14日に練馬区の記念庭園で、植樹式が行われました。

* 編集制作 / (公社) 園芸文化協会 編集委員会

* DTP デザイン / 中村奈保子 (ムルハウス)

* 写真提供 / 小笠原左衛門尉亮軒 川崎景介 高知県立牧野植物園 小松みち 練馬区 練馬区立牧野記念庭園 牧野一淳 柳宗民 (五十音順)

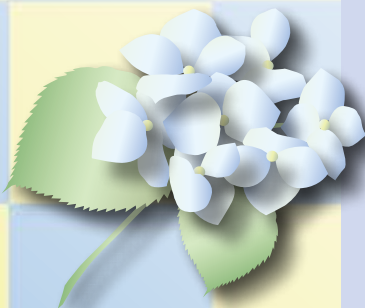
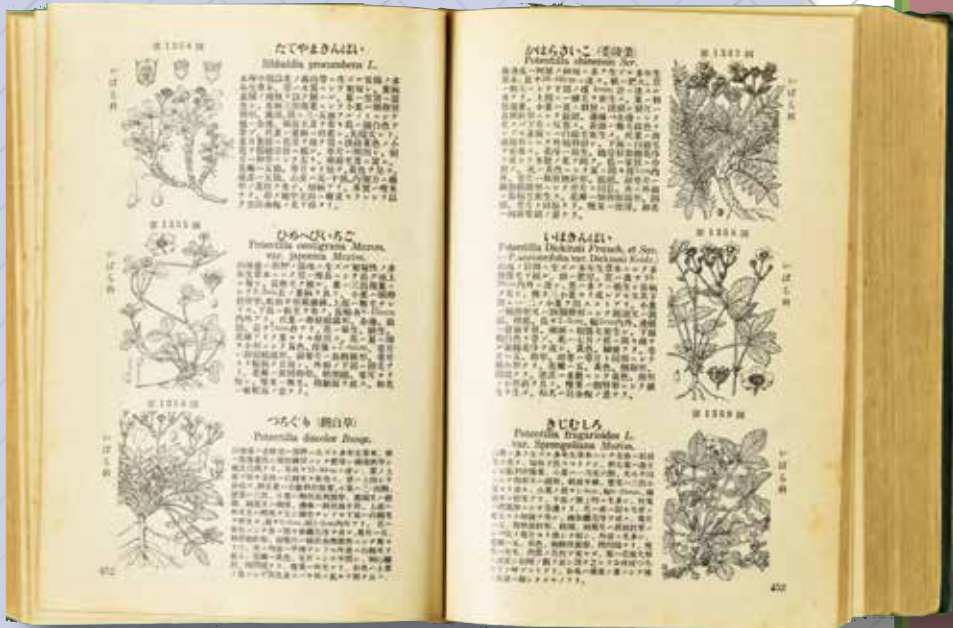




写真 1-1 『牧野日本植物図鑑』 昭和 24 年 北隆館刊 牧野富太郎著
左肩：背表紙 右：見開き本扉 下：本文見開き



寸暇録

連載第六回

牧野富太郎著作本とその出会い
そして 牧野先生が巻き起こした植物図鑑競合を辿る

一般財団法人 雑花園文庫・庫主
公益社団法人 園芸文化協会・隠居

小笠原左衛門尉亮軒

【寸暇録とは】

忙しい日々の暮らしの中で、少しの時間を利用して行うことなどを、寸暇云々と言うようです。園芸を楽しみとする人、園芸を業とする人、共に気づいた事柄や、植物育てをしたことを書き留めたらと思って名付けました。

(小笠原 左衛門尉亮軒・題字署名直筆)

入手までに半年と一カ月



昭和二十三年秋、新聞の一面最下段の広告の覧に、北隆館の『牧野日本植物図鑑』〈写真〉刊行の広告を見てから、この本が無性にほしくなった。当時中学三年生の自分には、価千五百円はとても高額であった。進駐軍の統治下、公定価格で一ドルは三百六十円、男性の日雇労働者の日当がニコヨン、即ち二百四十円の頃である。以降何とか千五百円を貯める為、見たい映画も見ず、出費のある友人との付き合いも断ること約半年、どうにか用途が立った頃には高校一年生となり、校内の書店に注文した。店主から届いたことを知らされ、代金を持って受け取りに行くと、千円以上の高額商品には物品税10%が必要で、従って千六百五十円になると告げられ、更に一カ月近くしてようやく入手することができた。



写真3『植物記』
昭和18年 桜井書店刊



写真4『続植物記』
昭和19年 桜井書店刊



写真2『園芸大辞典 第一巻 (あ〜か)』
石井勇義編 牧野富太郎ら監修 昭和24年10月 誠文堂新光社刊
左：背表紙 右上：本扉 右下：見開き内容



写真5『牧野富太郎傳』上村登著
昭和30年1月 六月社刊
(平成11年『花と恋して 牧野富太郎伝』
として高知新聞総合印刷により復刊)



写真6『牧野富太郎自叙伝』
昭和31年12月 長嶋書房刊



写真7『牧野植物一家言』
昭和31年1月 北隆館刊



写真8『草木とともに』
牧野富太郎 自伝的随筆集
昭和31年11月 タヴィット社刊



写真1-2
『牧野日本植物図鑑』
口絵一頁一図
奈良八重桜

植物本ラッッシュに追われて

次に牧野先生もかわっておられた『園芸大辞典第一巻(あ〜か)』(写真2)の刊行が誠文堂新光社から始まった(第六巻が昭和三十一年三月に刊。全六巻で完成)。次々と欲しい本の刊行に、何とかそれらを求める資金捻出のため、アルバイトをすることにした。

幸いにも私は寺の生まれで、八月のお盆には多くの檀家の方々が墓参りにおいでになる。そして近くは寺町であり、その数も多く、これこそわがアルバイトと、竹屋で太い青竹を求め、墓の前に立てる竹筒を作り、花市場へ自転車を出掛けては、シキミやホウズキなどお盆墓参用の花を仕入れ、自宅の門前にムシロ二枚を広げて並べ、約十日間商売をさせてもらった。当時の学生アルバイトとしては三から五倍の収益を得ることができ、以降高校生三年間のアルバイトで、欲しい本や当時発刊の月刊雑誌『農耕と園芸』(誠文堂新光社)や『新園芸』(朝倉書店)などを毎月求めることができた。

昭和三十年代に入ると、『植物記』(写真3)、『続植物記』(写真4)など、牧野先

写真 10-1 「シロロチクとクワンノンチクの渡来」
牧野富太郎著 自著生原稿
折帖仕立 昭和初年頃 全 37 枚



写真 10-2 初紙 (自筆ペン書き 実際園芸誌原稿用紙)

写真 10-3
第 14 紙

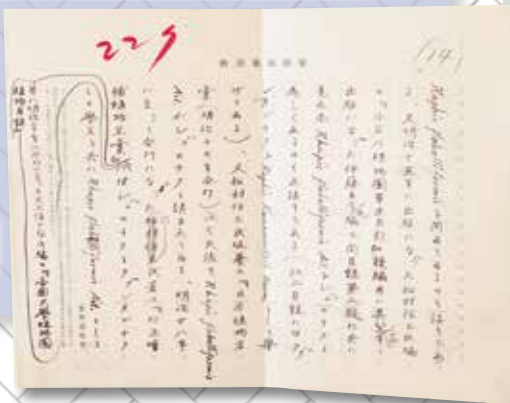


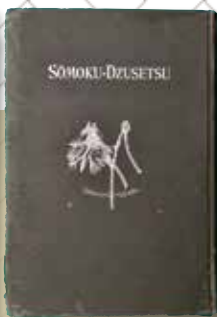
写真 9-1 『大日本植物志』
第一卷第一集～同第四集
牧野富太郎著
明治 33 年～同 44 年刊



写真 9-2
第一集第一図
ヤマザクラの図



写真 11-1 増訂草木図説
飯沼慾齋著 全 4 冊 牧野富太郎訂
明治 40 年 10 月 誠美堂刊



11-2 第 1 巻 表紙



11-3 第 1 巻 見開き本扉

11-4 本文見開き
原本木版墨刷から製版



生の伝記(写真5)や自叙伝、随筆集(写真6~8)が色々な出版社から次々と刊行され、これも読んでみると、先生の気宇壮大な考えや、植物を植物学的にみる目を教えてもらった。

昭和四十年代に入ると、いよいよ本集の病に効くワクチンは無し、止まるところを知らず。牧野先生の最も初期の刊行となる、『大日本植物志』(写真9)の第一巻第一集から第四集までを入手した。この四冊を刊行するに十一年の歳月を要したのは、一図一図に先生のこだわりがあったのか、あるいは大変失礼ながら、資金が続かなかったのか。この四集のみの刊行で終わったようだ。

昭和五十年代になると、私の本集めも本格化し、各地の古書店より、目録やオークション出展目録などが数多く送られてくるようになる。そうして見つけたのが、牧野先生自筆の誠文堂新光社発行の『實際園芸』第二十三巻第一号(昭和十二(1937)年七月号)への寄稿生原稿、「シロロチクとクワンノンチクの渡来」(写真10)であった。

植物図鑑の競合時代



『牧野日本植物図鑑』刊行以前のわが国の植物図鑑としては、江戸時代末期に近代植物図鑑の先駆けとして、木版本二十巻として刊行された、飯沼慾齋著『草木図説』があるが、それを牧野先生が増訂し、明治四十年に洋装本四冊の『増訂草木図説』(写真11)として刊行された。



写真 12-2 第1巻見開き本扉

写真 12-1 普通植物図譜 全5冊 背表紙
校訂 牧野富太郎
編集 東京生物学研究会 代表 村越三千男
明治42年10月 博文社刊

写真 12-3 本文 石版多色刷圖

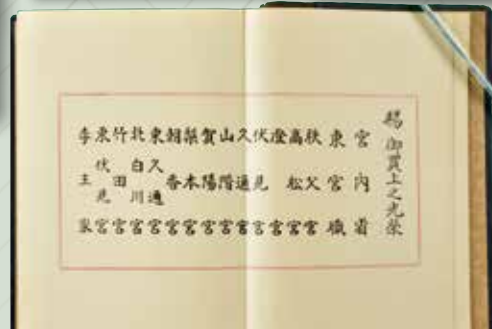


写真 13 『大植物図鑑』 村越三千男著
大正14年 大植物図鑑刊行会刊 河野成光館発売

上：本文内容見開き
上右端：背表紙
上中：見開き本扉
右下：賜 御買上之光栄一覽

続いて同じく牧野先生の校訂により、村越三千男著『普通植物図譜』五冊（写真12）が、明治四十二年に革背表紙金文字金の豪華装訂の石版多色刷本として刊行された。さらに村越三千男著『大植物図鑑』（写真13）がこれもまた豪華な革背表紙金文字で大正十四年に刊行されたが、加えて序を寄せた三名が東京大学理学部の錚々たる人々ということで、お買い上げ先の官公庁をはじめ多くの官家へ納められたことで、この本を権威付けている。

三つ巴合戦の一步先へと



しかしこれらの図鑑に対し、牧野先生は何か物足りなく思ったのか、如何にして実物の草木を手にした時、その正しい名称にたどり着けるかを追求し、村越本に対抗するかのようになり、**牧野富太郎著『日本植物図鑑』（写真14）**として大正十四年（村越本と同年）、北隆館より刊行された。日本の植物図鑑は、村越本と牧野本との戦いが昭和二十四年まで続き、更にその二書に割って入るようになり、昭和八年に春陽堂書店から寺崎留吉著『日本植物図譜』、続いて昭和十三年には『続日本植物図譜』（写真15）の二冊が刊行され、日本の植物図鑑は三つ巴の戦いとなっていた。余談であるが、昭和五十年、正統を合せ新しく作図、校訂により平凡社から一冊として、『寺崎日本植物図譜』（写真16）として発刊された。

このように、明治から昭和の年代は、日本の植物図鑑の三つ巴合戦の時代であったが、牧野先生は日本全国の植物同好会を組織し、その採集旅行などに気軽に赴き、植



写真 14 日本植物図鑑 牧野富太郎著
大正14年9月 北隆館刊

右上端：箱表紙
上中央：背表紙
左：多色刷ページ
中央下：本文内容見開き
右下：牧野富太郎肖像写真



写真 15
続日本植物図譜 寺崎留吉著
昭和13年10月 春陽堂刊

左：本文内容見開き
中央：見開き本扉
右：背表紙

写真 16 寺崎日本植物図譜
寺崎留吉図 奥山春季編
昭和50年5月 平凡社刊

左：本文内容見開き
中央：見開き本扉
右端：背表紙

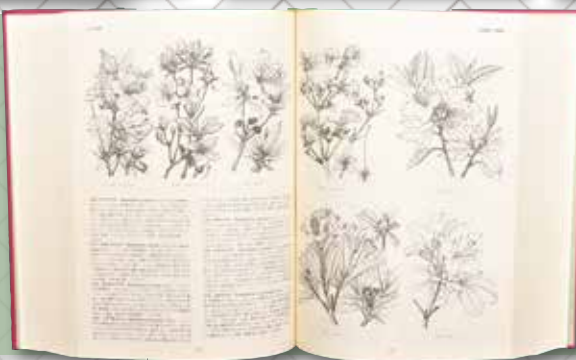


写真 17 牧野新日本植物図鑑
牧野富太郎著
編集 前川文夫 原寛 津山尚
昭和36年6月 北隆館刊発行

左：口絵原色図
右上：箱表紙 下：本文見開き



物好きを指導し、現在では植物図鑑と言え
ば『牧野新日本植物図鑑』(写真17)であり、
昭和三十六年、前川文夫、原寛、津山尚氏
らによって漢字は新字体に改められ、一部
改訂されて同じく北隆館から刊行され、現
在なおこの版が基本となつて、植物図鑑と
いへば牧野本と、日本の植物図鑑の基本を
成していると思つている。

牧野富太郎博士の 文献に見るエピソード

元牧野文庫司書 小松 みち

牧野文庫の書庫
高知県立牧野植物園提供

牧野博士肖像 1953年
出典：現代日本の百人



文献に浮かぶ人となり

私は、牧野富太郎博士が生涯をかけて収集した4万5千冊の蔵書を収めた牧野文庫の司書として、高知県立牧野植物園に長く勤務し、伝記研究にも携わって過ごしました。それも遠い昔のことになりましたが、退職後も博士への追慕の気持ちは変わらず持ち続けています。昨年夏には、博士のひ孫さんと、東京都練馬区の牧野記念庭園の運営をされている牧野一淳^{かずお}さんが高知に來られ、その際には佐川町にある古い牧野家墓所をご案内しました。町内の牧野公園には博士の分骨のお墓があり、皆さんがよくお参りされます。公園の上の方には博士の祖父母やご両親のお墓、さらにその山の南麓に初代の岸屋小左衛門以下、安永年間からの祖先の墓所があります。牧野家のご子孫の皆様と現在も交流を続けていただいていることに感謝しつつ、本稿では博士が書かれた文章や関連資料から、その人となりを窺わせるエピソードを選んでご紹介することにいたします。

名づけた花との再会で

私が牧野文庫に赴任して、真っ先に会った忘れえない博士のエピソードがあります。昭和10年、博士が立山に採集登山した時のこと、同行した富山県の植物研究家進野久五郎という人が残した記録に次のような場面がありました。「植物と自然」15巻14号(1981)。博士が一の越に來た時、進野氏が「先生が和名をつけたチョウノスケソウはまだ健在です。」とその場所に案内

すると、博士はとても喜び「名付け親が来たぞえ」と言いながら、斜面のガラ場に腹ばいになって花に頬ずりしたそうです。印象深いシーンだったと同氏は回想しています。私も博士の無邪気な花への愛情表現に大変感動したことを思い出します。「天真爛漫」、博士の本質はこれだと、その時納得しました。なお須川長之助は、博士が師と仰いだロシアの植物学者マキシモヴィッチの命を受けて日本国内あちこちで植物を採集し、マ氏に標本を送っていた人物です。かつて、牧野博士が長之助の功績を讃えて命名した花でしたから、この再会はよけいに嬉しかったことでしょう。

植物の精さながらの幼少時

博士は明治25年(31才)まで郷里の高知を本拠とし、植物相の豊かな土佐の天然の牧場で実地の植物学を身につけました。

生まれつき植物が好きで、「あるいは植物の精ではないかと自分で自分を疑います」と自叙伝にも記しています。そんな博士の幼少時代に触れた思い出深い植物のことを、ご紹介しましょう。佐川村はさほど広い村ではありませんが、6歳のじぶんから、生家の裏山にある金峰神社に上ったり、近隣で興味深い植物を採集したりして過ごし、「岸屋の富やあ、草やら虫やら採って遊ぶよ」と町の人が噂するような少年でした。採集してきた植物を自邸の裏庭に植えて観察し、また天性の図

描力で、それを精密な写生図に残しています。「土佐の植物に就て古い思い出」(『土佐の博物』5号)という、博士が佐川時代を懐かしんで書いた文章があります。バイカオウレンは博士がとても好んだ花としてよく知られていますが、その元になっっているのがこの一文だと思えます。

「此の、春早く可愛らしい花の咲く梅花オウレンが、佐川町西町の上の金峯神社から奥の土居へ下りる山道の片側の斜面に沢山生えている事を子ども時代に早くから知っていたので、今日この草を見ると頗る懐かしい思いがする。ことにその小さい梅花様の白花が他の草に魁^{まが}け、また時候の寒いのかかわらず、いち早く草の葉の間に咲きほころびる風情は決して忘れることのできない思い出の印しである」(一部省略)可憐な白い花バイカオウレンは、やはり博士にとつて強く郷愁を誘う最も好きな花だったのでないでしょうか。

ユキワリイチゲも、思い出の花の一つでした。「此も私にとつては極めて思い出の深い草で、いつもこれを眺める時にはいい



牧野富太郎原画「バイカオウレン」1892年制作
高知県立牧野植物園所蔵



バイカオウレンの花
背景の蔵は筆者が営むギャラリー「ぼたにか」



ハナカタバミ



ガーデンローズ「園の曙」
高知県立牧野植物園所蔵

しれぬ昔恋しい感情が流れ出るのを禁じることが出来ない。この草は私の少年時代に佐川町西谷の大塚彌太夫さんの屋敷の庭から山へ取り付く場所に生えていた。その時これを写生した図が今私の手許にある。

二三年前佐川へ帰省した時そこへ行ってみたら、やはり昔のままに依然として生えていたので大変に嬉しかった。久しぶりで昔の恋人に逢ったような気持ちでこれを採集し、標品に作って大事にしている。」

ハナカタバミについても次のように記しています。「佐川の西谷に和山茶好さんの宅があった。茶好さんは草木が好きであつたためその庭にはいろいろの草が植えてあつた。玄関の前に瓦で仕切つてカタバミの一種（今日云うハナカタバミ）が植えてあつて、秋になると美麗な紅色の花が咲いていた。当時その花を貰つてきて、写生したものが今も残っている。こんな訳で私はこのカタバミが大変に懐かしい。この品は徳川時代に渡来したもので初めオキサリスロ一ザといつていたが、後私がこれにハナカタバミの和名を下した。それはその花がこの類中最も美麗だからである。」

少年の博士が、ふるさと佐川のあちこちで心に残る花に出会い、記憶に留め、思い

出の文章を紡いでいることに温かい気持ちを覚えます。

博士の好きな花は？

さて、博士の好きな花は、どんな花でしょうか？ これまで紹介した花も、どれも何だか可憐で楚楚としているように私は感じます。次にご紹介するのは「園の曙」と博士が名付けたガーデンローズです。

「数年前に長崎に行き、千葉常三郎氏のお宅に宿泊した際に、入り口に誠にみごとな一重咲きの薔薇の花が笑みを含み媚びを呈するようにひらいていた。それを見ると欲心むらむらと起り、これを手活けの花として眺めたくて仕方なくなつた。一年ほどたった後、千葉君が接ぎ木して苗木を送つて来られた。私は大いに悦び大事に之を愛護培養した所、去年も今年も見事にその花が咲き、開花中は何時も飽かぬ眺めをほしいままにしたものである。此の薔薇の花は大きくて平開し、直径およそ10.5cm許りもある。十分手シオにかけて上手な人が栽培したらモット大輪な花を咲かすであろうことが想像せられる。花色は微妙しく黄味がかった桃色で、それが花心に近づくと漸次に淡く遂に白色となつていたのである。そ

して弁面に縦走する細脈が見られる。雄蕊の花糸は黄色で、葯は紺色、柱頭は淡黄色である。この薔薇はむろんもと西洋から来たもので何かその名があるのだろうか、今それを私は知らない。培養薔薇専門家が観たら多分分かる事だろうと思うが、私は今仮に日本の名を「園の曙」と命じた」（『植物動物の採集』1巻2号1937）

この文章のタイトルは「単弁花のガーデンローズ『園の曙』」、雑誌の口絵に写真も載せていますので、現代バラのどれに当たるのか、専門家が見れば分かるかもしれない。しかし、これほどに博士を惹きつけたバラとは、どんな姿だったのか、実物を見てみたい気がします。文章からもうかがえるように、博士はどちらかといえば、豪華な八重咲きでなくシンプルな「一重のバラ」を好んだようです。このガーデンローズ「園の曙」は、博士の嗜好を象徴しているように思えます。

園芸植物にも隔てなく

牧野博士は、植物分類学者で主に野生の植物を記載しましたが、残された随筆などの文章を読むと、園芸植物への関心も高かったことが知られます。博士の園芸植物につけ

た和名などはどれくらいあるのでしょうか。詳細に数えれば相当数にのぼると思われれます。そんな、園芸植物への関心を示すエピソードを次にご紹介したいと思います。

園芸家石井勇義氏は「牧野植物学全集」（全7巻 誠文堂新光社 昭和9〜11）を編纂した人ですが、同全集の編集後記に以下のような文章を綴っています。「私は先生

くらいこの世の中に幸福な方はないと思う。というのは、先生は植物に対して極めて深い深い愛着を持って居られる事で、野外出で植物を手に行っている時や、書齋にあって植物書を繙いておられる間は、全く天国にでも遊んでおられる心境であると思われれる。私は昭和7年秋に先生のお供をして九州を旅行したことがあつたが、その折りに宮崎市内の旅館から駅へと急ぐ自動車中で、私が民家の庭先ふと「酔芙蓉」の大株のあるのを見出し「先生、酔芙蓉があります」と言うと、先生は一眼見るなり感極まつてか両手を頭上にあてて暫く打ち伏してしまわれ、直ちに下車して思う存分材料を持ち主から頂戴して鹿児島に急いだことがあつた。先生が珍しい植物を見つけて採集した時の喜ばれ方は常人の到底想像できないところである。」（一部省略）

この石井氏の文章は、博士の植物へのあふれるような蕩尽な愛情について、言い尽くしているように思います。好きな草木の研究に生涯を捧げ、人間としてこれほどにも幸せな人はいないと改めて思います。今春始まる朝ドラに、植物を愛する天真爛漫な博士の姿がよみがえり、命が宿ることを願っています。

牧野記念庭園を訪ねて

『園芸文化』編集室 南場浩一・奥峰子

牧野記念庭園入口。春には満開のオオカンザクラが迎えしてくれる（練馬区）



庭園の中、博士の旧宅跡地に建てられている記念館。博士愛用の採集道具や博士が執筆した書物などが展示されている（練馬区）

令和4年10月、秋が深まりつつある中、東京都練馬区にある練馬区立牧野記念庭園を訪れ、記念庭園学芸員の田中純子様と練馬区環境部みどり推進課の平田彩様にお話を伺いました。

博士の思いが今もなお

ここは、牧野富太郎博士が生前、大正15（1926）年から博士が亡くなられる昭和32（1957）年までの30年あまりを過ごした住居と庭の跡地です。

博士の没後間もなく東京都が遺族の志を受けて、博士の居宅と庭の跡地を一般に公開する施設として整備しました。その後、練馬区に移管し、昭和33（1958）年12月1日に記念館を併設した記念庭園として開園。幼少時代を牧野博士の身近で過ごされた博士の曾孫・牧野一淳^{かずき}氏は記念庭園の運営に携わっておられます。

博士の94年間の生涯は植物と共にあって、その間、収集した標本は約40万点、蔵書は約4万5千冊と、個人としては膨大な収集数になっています。

博士が練馬区に住まいを定めたくっかけは、大正12（1923）年に発生した関東大震災の被災状況を目のあたりにして、収集した標本と蔵書の安全を図るためだったそう、その後、戦災や自然災害に遭うことがありませんでしたので、目的にかなう地であったといえます。

当記念庭園は博士がご存命だった頃と多少植栽は変わりましたが、それでも往時の姿を感じることは十分に出来ます。博士はこの庭を大変気に入られていて、生前、庭の植物の前にはしゃがみ込み、丸一日観察していることが度々あったそうです。

庭園の中にある記念館は平成22（2010）年にリニューアルオープンした二代目ですが、博士の旧宅の跡地に建てられています。老朽化で旧宅は取り壊されたのですが、博士の書齋と書庫の一部が記念館の隣に建つ書屋展示室（^{まよど}鞘堂）に収められていて、在りし日の博士が研究に勤んでいた姿が偲ばれます。

こよなく愛した植物の庭

庭園には博士にゆかりの植物が幾つかあります。スエコザサは、博士が昭和2（1927）年、仙台で発見したアズマザサの変種で、名前は博士の妻、壽衛^{すゑ}への感謝と愛情を込めて命名しました。庭園内の博士の胸像や顕彰碑・歌碑の周りに植栽されています。他にもオオキツネノカミソリ、ニシキマンサク、カタクリ、リョクガクバイ等があります。



書屋展示室に保存されている往時の書斎
(練馬区立牧野記念庭園)



サクラ「仙台屋」。高知市内の「仙台屋」
の前で見つけ、博士が命名したといわ
れる(練馬区)

ヒメアジサイ。1928年、博士が長野
県戸隠山近くの民家で発見。澄んだ花
色、花房の優美な姿に感動して命名し
た。表紙写真の解説参照(練馬区)



昭和12年、「我が植物園」と称した庭でつるぐ博士(個人蔵)

その足跡を振り返るとき

また、博士がお好きだった桜は 10種類
が植えられていて、中に、センダイヤとい
う桜があります。これは、博士が高知市内
の仙台屋という店の前で見つけた品種で博
士が命名したと言われています。博士は高
知県の知人に頼んで苗を取り寄せて庭に植
えられました。また、記念庭園入り口には
オオカンザクラがあり、春は桜の花で庭が
彩られ訪れるには一番良い季節です。

令和4年は博士の生誕160年にあた
り、練馬区では記念事業が幾つか執り行わ
れました。その中の一つに牧野記念庭園書
齋再現プロジェクトがあります。博士が研
究に没頭した当時の再現を目指していて令
和5年春に公開予定となっています。

また、記念館では年3回、博士にまつ
わる企画展も行っていますので、来園の際
にはぜひご覧ください。四季折々、庭園は
その姿を変えていきますので、季節毎に訪
れると、変わりゆく風情を楽しんでいただ
けると思います。

令和5年4月にスタートするNHK
の連続テレビ小説は、博士の生涯をモデ
ルに描いた「らんまん」です。昭和30年台、
博士は国民的スターと言われていたそう
なので、どのように描かれるのか楽しみ
です。

今年、あらためて牧野博士に光が当た
る年になりそうなので、当記念庭園や高知
県立牧野植物園を訪れる方も増えること
でしょう。今一度、博士の功績を振り返る良
い機会にしたいと思います。

練馬区立牧野記念庭園

所在地：〒178-0063 東京都練馬区東大泉 6-34-4
電話：03-6904-6403 FAX：03-6904-6404
入園料：無料 開園時間：午前9時～午後5時
休園日：火曜日(祝日には開園、翌平日休園)・年末年始
アクセス：西武池袋線 大泉学園駅(南口)より徒歩5分。
牧野記念庭園ホームページ：<https://www.makinoteien.jp>

*詳細及びアクセスMAPは裏表紙をご覧ください

フラワーデザインに託して

マミフラワーデザインスクール校長
花文化「コメンテーター」・園芸文化協会理事

川崎 景介

軽やかなリズムが
聴こえてくるような「花くぼり」



日本フラワーデザイン界の草分け
マミ川崎



本邦における フラワーデザイン草創期に

花は私たちにたくさん喜びをくれます。花を育て、飾ることで暮らして潤いをもたらされるのを多くの人が実感していることでしょう。「園芸文化」の読者の皆様は花を育てるのがお好きかと思いますが、今回は切り花を素材にした表現技法のひとつであるフラワーデザインのお話をいたしましょう。

日本には四季折々の花や枝葉をいけて美しい作品を生み出す、いけばなという素晴らしい芸術があります。英語でも I KEBANA と表記されるほど日本を代表する文化の一つとして世界にその名を轟かせています。いっぽう、明治以降には洋花やそれをいかした西洋風の飾り方が我が国に伝えられました。当初、それらは洋風花卉装飾、あるいはフラワーデコレーションなどと呼ばれ、生活の洋式化に伴い、徐々に社会に根付いていったのです。昭和10年（1935年）には洋風花卉装飾のことを FLOWER DESIGN と表記した記録が残っています。戦後、花業界関係者各位の努力により特にアメリカからフローラルアートの技術が我が国に伝えられ、テーブルアレンジメント、ブーケ、コサージュといった目新しい洋風花卉装飾が次々と紹介されていきます。

昭和37年（1962年）、東京で一人の女性が希望者を募り、洋風の花を教え始めるのですが、この人物こそ初めてフラワー

デザイナーと呼ばれることになる私の母、川崎真美子こと後のマミ川崎です。

日本初のフラワーデザイナー マミ川崎の目指したところ

北海道でクリスチャンの家庭に育った真美子は、戦後間もなくアメリカ中西部の大学に留学し、教育学を学ぶかたわら休日を利用してミズーリ州カンザスシティの花店で働きました。そこで彼女は、気軽に花を贈り合い、コサージュなどを身に付けて楽しむアメリカの花文化に触れ、感銘を受けます。帰国後、新聞記者として働き、結婚や出産を経て、改めて社会に貢献したいと考えた真美子は、自宅で花の教室を開きました。そんな折、某雑誌社が彼女の活動を取材するため教室を訪れ、彼女にフラワーデザイナーという肩書をつけます。クリエイティブな仕事を「○○デザイン」と命名することが当時流行しており、花に携わるクリエイティブな人と言う意味で真美子はフラワーデザイナーと呼ばれるようになりました。さらに、その活動がフラワーデザインの呼称で紹介され、マミ川崎という洋風の通り名が徐々に定着していきます。母は私が幼い頃から周囲の人々に「マミ先生」と呼ばれ、「マミさん」と呼ばれていて、私もしばしば母の本名をマミだと思いついて、いたぐらいマミ川崎という名は本人にとっても愛着のあるものになったのです。

そんな中、マミ川崎は予てから興味を抱いていた教育事業と、洋風の花から発想を



パショウの葉を花留めに
用いた「花くぼり」



マミ川崎と生徒たち

得たフラワーデザインとの更なる和合を試みます。花を器に配したり、束ねたり、他の素材と組み合わせたりといった基礎を習得しながら、その人ならではの作品を生み出すことで作り手の感性が磨かれ、また表現の自由度が高まっていくのを感じた川崎は、フラワーデザインが個人の自主性を育む感性教育の手法として極めて有効であることを確信したのです。マミ川崎自身、フラワーデザインに対する自らの思いを次のように語っています。「自分の心の感動を表現することが大切だと思います。……とにかく、いっぱい感じて、いっぱい表現してほしいと私はフラワーデザインを学ぶ皆

さんに言っています。自分が表現したいことを正しく表現できる人を育てるのがフラワーデザインの大きな目的なのです。」

東西の技法と自然の融合 自分らしい感性の表現へ

フラワーデザインは洋風花卉装飾の延長線上にあるものなのかという点、決してそれだけではありません。マミフラワーデザインスクールで学んだフラワーデザイナーは、日本文化やいけばなにも多くを学び、「日本ならではの新しい花のありかた」や「自分らしい花のありかた」を模索してきました。表現者は、線が生み出す余韻の美しさを重んじ、微妙な間を意識するなど、日本人の美意識を反映させつつ、日々研鑽を積んでいます。また、自然素材で花を留めるといういけばなの技法に少なからず影響を受けた「花くぼり」も、マミフラワーデザインスクールの大きな特徴です。枝、茎、葉、根などはもちろん、植物以外の多岐に渡る自然素材を花留めとして工夫する「花くぼり」の技法には、その素材も作品の視覚的な一部になり得るという点でまだまだ発展の余地があると言えます。

フラワーデザインは、西洋風フローラルアートを一つの出発点とし、また日本文化も反映しつつ培われた表現技法であり、より幅広い世界に根差した花のありかたです。それはまた、花に触れることで感性を磨き、自分らしさを表現するための手段でもあります。

牧野富太郎博士の植物愛を存分に体感できる 高知県立牧野植物園

公益財団法人高知県牧野記念財団・広報課

春の南園 50周年記念庭園
*全景写真は裏表紙参照
(写真提供：高知県立牧野植物園)



牧野富太郎像（南園 曲水の庭）
牧野博士の採集風景をイメージしたブロンズ像。右手にカラカサタケを掲げている姿。昭和49年造立。
制作：本郷新（写真提供：高知県立牧野植物園）

牧野富太郎記念館・展示館

土佐漆喰、高知県産の木材、県内の家具・工芸作家の作品のあしらいでゆったり落ちついた雰囲気。常設展示室には牧野博士の生涯の展示と体験型展示、企画展示室では年に数回企画展を開催している（写真提供：高知県立牧野植物園）

高知県立牧野植物園

所在地：〒781-8125 高知県高知市五台山 4200-6
電話：088-882-2601（代表）
入園料：一般 730円（高校生以下無料）
開園時間：9:00～17:00（最終入園 16:30）
休園日：年末年始、メンテナンス休園日あり
ホームページ：https://www.makino.or.jp

*詳細及びアクセスMAPは裏表紙をご覧ください
(写真提供：高知県立牧野植物園)

高知県立牧野植物園は、高知出身の植物分類学者 牧野富太郎博士の業績を顕彰する植物園です。「植物園を造るなら五台山がええ」という90歳を超えた牧野博士のこの一言で、四国霊場第31番札所 五台山竹林寺の「南の坊」跡の周辺を譲り受けて造られました。

現在約8haにもおよぶ広大な園内では、西南日本の植物を中心に博士ゆかりの野生植物など3,000種類以上が四季を彩ります。散策をしていると、植物のラベルが沢山あることにきっと驚かれることでしょう。牧野博士が「名なし草などという植物は一本もない。」といったとおり、全ての植物には名前があり、皆さんがすぐにその名前を知り植物に親しんでいただけるようにと設置しています。また、牧野植物園ならではの工夫もあります。一部ですが実際の植物の隣に牧野博士が描いた植物図を陶板にして展示しており、見比べてご鑑賞いただくことができます。博士の比類なき観察力と描画力をぜひ体感してください。

ところで、牧野博士はどんな人だったのでしょう。そのヒントに出会えるのが、牧野富太郎記念館です。正門から皆さんをお迎えする本館と展示館があり、展示館の常設展示「牧野富太郎の生涯」では94年にわたる生涯を博士が実際に使用した植物採集道具や研究道具、ノート、日記などの遺品類を再現し、さらに「牧野蔵」では自筆の植物図などを多数展示して紹介しています。さらにオリジナル作品を上映する4Kシアターも併設しており、高知の自然や植物園の四季などを楽しみながら博士への理解を深めることができます。なお、常設展示をご覧になった後は、牧野博士ゆかりの植物約250種類を植栽している中庭の散策がおすすめです。

このほか、園内には土佐寒蘭センターや温室など見どころが多数あり、2023年春には新しい研究棟もオープンし、眺望のいいレストランやキッズラボなどがお目見えする予定です。牧野植物園で「草木の精」牧野富太郎博士が愛した植物に囲まれて、博士の生き方に思いを馳せるひとときを過ごしませんか。



がらくた農園始末記

近ごろ市販されている園芸植物は、一体、何種類ぐらいいあるのだろうか。とにかく、たいへんな種類数で、年々新顔が登場して、とても覚えきれない。その原生地も、さまざまである。ということは、わが国の気候に合わぬものもかなりある。かつては、プロでも気候風土に合わぬものは、それをつくりこなすのにならざるを苦しめたものだ。最近では栽培設備の向上や、資材面の進歩、輸送の発達による適地適作などのために、むかしは栽培のむずかしかった種類も、容易に仕上げられて市場へ大量に出まわる時代となった。むかしを知る者には隔世の感がある。ところが、これが消費者の手に入



がらくた農園の一部分(平成8年初夏)。100種以上の植物で埋めつくされている

てから、どうなるか、暑さ寒さに強いのか弱いのか、その説明もなしに売られているものが多いし、素人の手に負えるのかどうか、売る側もよくわかっていないで、売られていることも多い。オーストラリアや地中海地方などの乾燥地原産の種類など、わが国の夏の高温多湿には耐えがたいし、一般の人たちには、熱帯植物ならば、なんでも夏は平気と思う人が多いが、熱帯高地生まれの植物は、わが国の夏の暑さでは弱ってしまいがち。

ということ、種類が増えるほどに、消費者にどう説明するかが目下、私の悩みのひとつだ。

新しいものが登場すると、そのたびに仕入れてきてわが家の農園におく。放っておいて、つぎの年までもつものなら大丈夫? この乱暴な判定法のおかげで、わが農園はがらくた農園に化しつづける。嗚呼……。(通巻第一二一夏号 平成八年発行)

プロフィール・やなぎむねたみ
(執筆当時 園芸文化協会監事)
一九二七(昭和二)〜二〇〇六(平成18)年。柳育種花園を経営するかたわら、NHK「趣味の園芸」のレギュラー講師を長年務めた。昭和37〜平成18年まで園芸文化協会理事・監事・評議員を歴任。平成12年度園芸文化賞受賞。

事務局より (協会案内)

公益社団法人 園芸文化協会は1944(昭和19)年に、園芸による文化の進展を目的に設立された園芸愛好団体です。まもなく創立80年を迎えます。園芸文化の普及と発展のためにさまざまな活動を行っています。

主な活動

- ①園芸セミナー(講座、見学会など)の開催
- ②協会報『園芸文化みんなの広場』、協会誌『園芸文化』の刊行
- ③功労者表彰(園芸文化賞)
- ④調査研究
- ⑤園芸活動への支援(講師紹介、審査員派遣、寄稿・監修、後援協賛、賞の交付 他)

会員特典

- ①当協会主催の園芸セミナー等に会員価格で参加できます。
- ②各種園芸イベント等の招待券や優待券を進呈します。
- ③協会報や各種園芸イベントの案内など役立つ情報をお届けします。
- ④園芸に関わる方々との交流の場を提供します。
- ⑤賛助企業より特別提供品を進呈します。(入会時、交流会参加時)

入会について

- ・会費 正会員(個人) 5,000円
正会員(団体) 10,000円
賛助会員(企業等) 1口 20,000円〜

- ・いつでも、どなたでも入会できます。
- ・会費の有効期限は納入日より3月31日までです。
- ・個人会員に限り、10月1日以降入会の場合、初年度のみ年会費半額(2,500円)となります。

入会方法

- ①郵便振替にて
専用の「払込取扱票」にて年会費をお払い込みください。
- ②入会申込書にて
銀行口座への振込や請求書の発行をご希望の方は、「入会申込書」を事務局あてご送付ください。申込書到着後、入会手続き方法をご案内いたします。

公益社団法人 園芸文化協会 事務局

〒113-0033
東京都文京区本郷1-20-7 安藤ビル202号室
電話：03-5803-6340(平日10:00~17:00)
FAX：03-5803-6341
メール：enbun@soleil.ocn.ne.jp



高知県立牧野植物園

<https://www.makino.or.jp>

牧野博士の生誕地・高知県の五台山に広がる植物園です。博士逝去の翌年、1958（昭和33）年4月に「南園」が開園。その後も敷地や施設を拡充し、展示やイベントも充実。植物園の役割である保存・研究・教育普及・憩いの場のすべてを備えた総合植物園として歩み続けています。（p.12 参照）

[写真提供：高知県立牧野植物園]

牧野富太郎博士

ゆかりの聖地

西
東

練馬区立牧野記念庭園

<https://www.makinoteien.jp>



牧野博士の自宅跡に建つ記念庭園。1958年より「牧野記念庭園」として一般公開されてきました。博士の愛した草木の数々、学術的にも価値のある植物が多数。記念館には博士の遺品や著書などが展示され、書屋展示室では博士の書齋が保存されています。

（p.8～9 参照）
[写真提供：練馬区]



園芸文化 No.131

2023年1月

編集発行：公益社団法人 園芸文化協会

発行責任者：三好 世紀

編集：(公社)園芸文化協会 編集委員会

編集委員 (南場 浩一 奥 峰子)

事務局：〒113-0033

東京都文京区本郷1-20-7 安藤ビル202号室

TEL 03 (5803) 6340

FAX 03 (5803) 6341

E-mail：enbun@soleil.ocn.ne.jp

HP：http://enbun.org

*無断転載・複製・複写(コピー)を禁じます